

## 博物館紹介

## あおもり北のまほろば歴史館



あおもり北のまほろば歴史館 外観

「あおもり北のまほろば歴史館」は、平成27年7月26日にオープンした青森市の新しい社会教育施設で、「青森市を中心とした郷土の歴史や民俗を総合的に紹介する展示施設」に位置づけられている。

歴史館の建物は「旧みちのく北方漁船博物館」を活用したものである。平成26年に、青森市は当時みちのく北方漁船博物館を設置・運営していた「公益財団法人みちのく北方漁船博物館財団」より施設等の譲渡を受け、その後、改修工事等を行い、「あおもり北のまほろば歴史館」として整備した。

歴史館の展示資料は全部で約900点、そのうち約700点が旧青森市歴史民俗展示館「稽古館」（平成18年に閉館）の資料、約70点が旧みちのく北方漁船博物館の資料、そのほか

発掘調査資料等などが展示される。

施設概要は次の通りである。敷地面積は4,594.65㎡、延床面積は3,292.59㎡。主たる室は、エントランスホール、大展示スペース、企画展示室（多目的室）、会議室、展望室（展望台）となっている。

そして歴史館には指定管理者制度が導入されており、オープン当初から、われわれ特定非営利活動法人あおもりみなとクラブが管理運営を行っている。

次に、歴史館の展示概要について紹介しよう。資料展示は、9つのコーナーで構成されている。

展示コーナー①「縄文時代から近代の歩み」では、縄文時代から近代に至るまでの青森のあゆみを紹介。展示コーナー②「津軽海峡沿

岸のムダマハギ型漁船と漁業」では、国指定重要有形民俗文化財「津軽海峡及び周辺地域のムダマハギ型漁船コレクション」などを展示。展示コーナー③「昔の生活用具/昔の農業の様子」では、昭和初期の民家の再現や昔の農業の様子を紹介。展示コーナー④「近現代の青森」では、青森ねぶたの歴史や青森大空襲、昭和の子どもの遊びなどを紹介。展示コーナー⑤「商いと看板」では、江戸後期から昭和初期頃にかけて使われたさまざまな「下げ看板」を展示。展示コーナー⑥「青森市名誉市民・青森市ゆかりの人々」では、青森市名誉市民と青森市ゆかりの人々を紹介。展示コーナー⑦「『道具』から『機械』へ/手ぬぐいの型紙で巡る青森のお店」では、ねじ巻式の懐中時計、オルガンや蓄音機、市内にあった商店の広告用手ぬぐいの型紙を展示。展示コーナー⑧「着物の世界」では、青森県指定有形民俗文化財「青森の刺しこ着」(津軽こぎん刺し着物、南部菱刺し着物、裂織着物(サグリ)、木綿つづれ刺し着物)の一部を中心に展示。展示コーナー⑨「青森市の発展と景観」は展望室にあり、青森市街、陸奥湾、津軽半島や下北半島を一望できる。青森市の合併のあゆみや青函連絡船の歴史も紹介。



展示コーナー⑧着物の世界

今年度歴史館では、最近注目を集めている津軽こぎん刺しに焦点を当て、ワークショップを定期開催することにした。まず津軽こぎん刺し着物の全部の種類を見学、展示解説を聞いて知識を深めてもらうというのは、歴史館ならではのワークショップと考えている。参加者が嬉々としてかつ真摯に取り組んでいる姿を見るにつけ、博物館活動の意義と必要性、醍醐味を痛感させられる。

解説員の「モノ」語りを聞くだけではなく見学者自らが「モノ」に語りかけ、「モノ」の声を聞き、「モノ」に触れ、「モノ」を創り上げる。そのプロセスで自身の糧になるものが実を結び、同時に次代へと伝えていくべきものが見いだされるのだと思う。

地域社会、学校教育、家庭教育、観光、まちづくりなど、さまざまな分野に活かすことのできる材料を取り揃えている。オープンから1年経ち、そのような点から、あおもり北のまほろば歴史館の存在意義を再認識することで、今後の展望もみえてくると確信できるようになった。

われわれ管理者が単独で、波及効果を及ぼすほどのダイナミックな事業展開をすることは困難を伴う。むしろ地域の人たちとじっくりと語り合いながら「北のまほろば」を追究する活動を地道に積み上げていくことにこそ、その役割が求められている。日々の管理業務のなかで、そんなふうに感じている。

歴史館の見学者や利用者との対話を重ねるなかで、この本州最北端の地についての新たなイメージが見えてくることがある。このように「北のまほろば」の本質を探っていく作業は、とても魅力的なのである。

(あおもり北のまほろば歴史館

副館長 石山 晃子)